



exacqVisionの先進性 —過渡期におけるローコスト ハイブリッドNVRの役割—

サンシステムサプライ 代表取締役
 岸尚弘氏

サンシステムサプライ

サンシステムサプライは1980年設立当初から、電子計測制御分野を中心に事業展開してきている。いわゆるエンベデッド(組み込み)システムの開発および設計の担当である。そのため、アナログ技術とデジタル処理と双方に対応できるのが特徴である。その後、時代の趨勢からフィールド計測制御分野においても「見える化」の要請が高まってきたことから、映像管理の分野に着手することにした。

2005年、2002年設立の米国インディアナポリスに拠点を置く企業で、デジタル機器およびソフトウェアを開発設計しているエクザックテクノロジーズ(Exacq Technologies)社の日本総代理店となり、同社のエクザックビジョンの日本語版化(現在のSunVision)を担当した。

2008年、サンシステムサプライは、ビデオ監視市場に本格的に参入して、エクザックビジョンのハイブリッドサーバ、IPサーバおよびVMS(ビデオ・マネジメント・システム)であるSunVisionなどの幅広い製品ラインアップを映像監視市場に提供している。その提供内容は、アナログカメラからIPカメラを1台から数千台までの規模でスケラブルにサポートしている。

同社では現在、SunVisionをNVRにインストールして市場に提供するだけでなく、システム規模に応じたサーバベースでの提供にも力を入れている。

岸氏は、講演の冒頭、監視カメラの現状を「アナログからIPへの過渡期」と定義した。このような状況では、「アナログカメラ+DVR」、「IPカメラ+NVR」、「アナログカメラを残しつつIPカメラを追加」という3種類の導入パターンが考えられると説明した。同社が最も注目している分野として同氏が紹介したのが、「従来のアナログカメラを残しつつIPカメラを追加導入する「ハイブリッドシステム」である。同社のexacqVisionハイブリッドサーバなら、1台でアナログカメラを16台づつ最大64台接続することが可能で、同時に64台のIPカメラが利用できる構成にも対応している。

具体的な先進性

exacqVisionの先進性として、岸氏は3つのポイントを紹介した。1つ目は「スケラブル」であり、「1台から最終的には数千台のカメラを順次統合できる」と語り、カメラを柔軟に拡張可能であると述べていた。2つ目は「マルチサーバ/マルチクライアント」で、1台のサーバに接続可能なIPカメラ数は最大64台、クライアントから同時にアクセスできるサーバは最大62台となっている。3つ目は「クロスプラットフォーム」で、サーバはPCベースでありWindowsとLinuxに対応、クライアントはWindowsやLinuxはもちろん、Macintoshやスマートフォン、携帯電話でもサーバにアクセス可能である。また17社、約300モデルの最新IPカメラに対応することもexacqVisionの利点と強調した。

Win-Winの方程式

講演の最後に、岸氏はH.264 IPカメラ利用による帯域やストレージ容量の低減、メガピクセルの高画質を利用したカメラ台数の削減、PoEによる配線コストの削減などとexacqVisionの優位性を組み合わせることで、大幅な導入コストの削減が可能であり、導入側も供給側も利点を享受できる「Win-Winの方程式」を示し、exacqVisionがアナログカメラからIPカメラへの過渡期に特に有効なシステムであることを強調して講演を締めくくった。

